

亜蘭砲と稲村賢敷の古琉球

大西威人

目次

はじめに (考察の方法)

- 1、「使者」亜蘭砲とその姿態変化
- 2、亜蘭砲の中山化と陶磁器商人の大陸拠点移動 (14世紀末から15世紀初)
- 3、第四の主役：大里勢力 (稲村賢敷のてどこん)
- 4、琉球＝福建航路の当時の状況と宮古・八重山の対琉進貢

試論：宮古・八重山史のあやうさ

はじめに (考察の方法)

琉球文書で宮古島の歴史を最初に飾るのは1390年 (以下では暦年は全て西暦で示す。文献から引用の場合も西暦に変換した数字で示す) とされる与那覇勢頭による中山進貢である。ここでは琉球＝明関係を見習って宮古・八重山から進んで貢納が行われたと書かれている。元来大陸の宋や日本の文献に現れる琉球人イメージは「食人・野蛮という先入観を前提にして描かれている」とすれば、この状況下での宮古・八重山の中山進貢は殺伐な騒乱状態からの脱出口として描かれざるをえない背景があったといえよう。^(注1)

琉球史料において宮古・八重山の中山進貢が、大陸留学生 (官生) 派遣の動きに続いて記録されているのはそのことを象徴するものである。しかし本当の状況はどうであったのかは不明のままである。

本稿では「古琉球」(以下単に古琉球と表現する) という言葉によって、一旦このような前提から自由に歴史経過を追ってみたい。古琉球は一般的には16世紀以前を指すものとして使われているが、本稿では基本的に『歴代宝案』等を主要史料として論じられることが可能な1425年に先立つ時代のことを考察する。古琉球の時代の出来事は裏付ける史料が稀なこともあり、あまりにも曖昧な前提で歴史記述がされてきたようにも思える。ここでは宮古島と古琉球の関係についての従来の議論の重要な前提の再吟味を行いたい。幸いそれに関する幾

(注1) 琉球国の野蛮・非文明としてのイメージは既に大陸で定着していたとされている (豊見山182。以下同様に引用文献リスト中の姓及び引用頁をこのように示す)。日本においてもほぼ同様だったと思われる。しかし、より洗練された少し異なる認識もあった。例えば、1243年9月に肥前国小値賀島を出帆した後、琉球国の東南方へ流れ着いた船頭及び同乗の僧からの聞き取りを記したものとされる『漂到琉球国記』の9月21日付の次のような表現があったことが既に紹介されている。「二、三艘の船がやって来た。そこに将軍が乗っていて、赤色の衣服を着て、赤い頭巾で頭を巻いていた。しばらくすると十余艘の船が競うようにやって来た。各船十余人が乗っている。それぞれ鉾楯、弓箭を持っている。一斉に激しく矢を放つと雨霰のようである。矢は早く遠くまで飛び強力な威力を持つ。楯を持って泳ぐ姿は水鳥のようであった。(山里209)」という姿である。このため、「将軍をリーダーとする集団が琉球諸島に存在した」のではないかという予想によって、琉球国の出現前の古琉球こそこれらの集団の活躍の場だったのではなかろうかという幾分修正された認識も提示されている。果たしてそれが古琉球の状況を典型的に示すものだったのだろうか。

つかの論考が既に提供されているので、それらを参考にしたい。

細部に拘ってみよう。宮古島と古琉球を最初に繋いだとされる与那覇勢頭（以下ではマサクと表現する。実質的には彼と行動を共にした十数人とされるマサク集団を指すが、慣習化している単数代表名で示す）が進貢したのは本当に上述の年の出来事だったのか、彼等の本当の目的は何だったのか等の具体的な様相についてはあまりにも不明なことが多い。そのため考察の起点として、従来から提供されてきた二つの論点を重要な手がかりとしたい。一つは小葉田淳の古典的業績である「琉球から明への南方物資の朝貢は1390年を最初とする」という『皇明実録』（以下『明実録』）から引き出された事実であり、もう一つは有力な宮古島史家達が琉球史料と宮古島旧記類を使って提示してきた「マサクの中山進貢は察度王に対するもので1390年の出来事だった」という主張である。ここではその当時の古琉球・宮古・八重山が置かれている状況をより明確化するために、差し当たり1380年から15世紀初頭に至る時期に絞ってこの地域の政治・経済的状況の推移を具体化したい。

この際の重要な留意点として従来の中山王朝中心の古琉球史の見方にも反省を加えたい。近年の漢文史料研究者は、古琉球の時代史において「中山」という言葉に惑わされてはならないと指摘している。この論者に拠れば、『明実録』底本の最も古い（1402年以前と思われる）記録では、「中山」ではなく、「鍾山」とあるとのことである。その際「中山」という言葉は本来表音的な表現に過ぎないのに、その後表意的に受け取られて誤解を招いてきた、という（孫212, 106）。^(注2)

次に、そもそも古琉球において、中山と南山（山南）とはどの地域を指していたかという問題がある。これについても沖縄史料の示す領域区分は三山時代よりかなり後の状況であったのではないかとかねてより指摘されている（生田366）。即ち、最初の公式沖縄史料とも言える『中山世鑑』は「山南王は大里按司で、佐鋪、知念、玉城、具志上、東風平、島尻、大里、喜屋武、摩文仁、真壁、兼城、豊見城の十一カ国を従え、山北王は今帰仁按司で、羽地、名護、国頭、金武、伊江、伊平也を従え、中山（中山は首里の王城を指す）王は那覇、泊、浦添、北溪、中城、越来、読谷山、具志川、勝連、首里三平等を従えていた」と述べている。しかし『中山世鑑』における察度王を含む三山時代そのものが、琉球（三山）統一の説話を尚巴志を中心にまとめあげた英雄伝説であったとすれば、琉球＝明諸史料の前提する領域区分も尚真時代の中央集権成立時期に想定された地域区分にすぎないかもしれない（生田355-370）。

この点で当時の明の認識について最近次のような指摘があるのは興味深い。1683年の冊封使である汪楫が『使琉球雑録』の中で「（琉球国）の南部に山があり、南山と言ひ、太平山とも言ひ、国の人は、これを爺馬（イエマ）と呼ぶ。国の北部を北山と言ひ、二大島とも言う。いずれも、中山と望みあう」と論じていたと言ふ（孫213）。この明官吏の認識においては、「中山」とは「沖縄本島」のことであり、「南山」、「太平山」とは宮古・八重山のことであろう。「北山」は奄美・喜界島あたりではないだろうか。これ全体を「琉球国」と認識していたように思われる。もちろん汪楫は琉球を訪れた後になって、「承察度は中山の南にあり、怕尼芝は中山の北にあるもので、同一の山を分け、治めている。先島と奄美の二大島を指すのでない」と認識を新たにしていた（孫213）。しかし17世紀においても明の使節がそのような認識だったとすれば、14世紀の明側の文書に示

^(注2) 孫は、「遼寧省档案馆に保存されている琉球について記録した最も古い史料から、サトゥ（査都）の肩書に使われている文字は「中山王」ではなく「鐘山王」であったこと、「中」も「鍾」も/zhong/と同じ発音である」と主張している（孫105）。また他にも大陸にある漢文史料から分かることとして、「北山」についても琉球史料が言うように攀安知が山北王として冊封を受けた記録は明側にはない。攀安知に関する記録は1396年1月から1415年4月迄に10回朝貢を行ったという事実、その他を明らかにしている（孫120）。

された「三山」がどのような領域を指したか、少なくとも周縁部をどの程度含んでいるのか、を現存の琉球史料だけで判断するのは疑問であろう。

また明の朝貢体制においては、認定した地域支配者を「王」と名付け政治主体化（朝貢主体として）するが、それは必ずしも現地住民が地域統治者を呼ぶ名称ではない。古琉球のいわゆる三山の王についても、例えば「よのぬし（世之主）」或いは「あじおそい（按司添）」と呼ばれていて、必ずしも明体制と同じ支配構造を表現するものではなかったであろう。それぞれの世界の二つの表現は共存していたが、「琉球側もやがて中国側の認識を受け入れ、自らも「王」を自称していくようになる。ただし、「世之主」称号も16世紀、第二尚氏王朝の尚清王頃まで使用された・・・（中略）・・・つまり察度以前・・・（中略）・・・自らの勢力を「中山」とも自称していなかった。「近世期に登場した「王統史観」では、中山の舜天・英祖・察度王統、統一後の第一尚氏・第二尚氏王統が区別されているが、古琉球では歴代の「王」を血筋で分けず、舜天（尊敦）を初代として数えていた」（上里66-67）と表現されたりもする。

以上の理由から、以下では古琉球の対明関係を探る上で朝貢主体の（三山の）君主名の変遷に注目するよりも、事実上の通航者（使者）、ここでは具体的には亜蘭匏の役割の転変を通じて当時の状況を明確にしたい。当然のことであるが古琉球も当時の大陸アジア及び日本の地政学的状況の影響下にあった。例えば対明通交のごく初期の代表的な貢物が馬と硫黄であったが、それは主として明の北部・西部に対する激しい戦闘的拡大を背景にしたものであったろう。しかしそれは同時に、この戦闘で生じる明の周辺勢力との人的交流もまた古琉球に及ぶものでもあった筈である。とはいえ古琉球にとっても通交の最も重要な要因は大陸産の陶磁器を得ることであったろうし、それを得るための南方産物の取引であっただろう。そのことは亜蘭匏の活動の中で徐々に姿を現してくる。

しかし琉球史料に現れた亜蘭匏は宮古・八重山に直接現れない。亜蘭匏（イラファ）という名称自体が漢文表現であり、古琉球の人々の呼び方とは乖離していた筈である。沖縄史に携わる識者からは「伊良部」或いは「伊良波」のことだと解されている。しかし漢文史料に従って考察を進める便宜上、ここでは亜蘭匏としておきたい。それは漢文史料の「倭寇」という用語で当時の状況を表現する場合と同様である。果たして宮古・八重山から見て古琉球の時代は どう理解すべきなのだろうか。稲村賢敷の三山抗争論を参考にして、古琉球史についての視野拡大を試みたい。

1、「使者」亜蘭匏とその姿態変化

A) 明の遼東制覇と琉球からの軍事物資（1381年までの古琉球前史）

古琉球の対明通行開始には元を駆逐した明の新興国家形成が前提条件である。特に遼東方面での高麗との関係を含む政治的安定化は国家成立の基礎であった。古琉球の進貢物資は明にとってどれ程の重要性を持っていたのだろうか。この点の評価をするため簡単に当時の状況を振り返りたい。

1367年大都を陥落させて蒙古を敗走させた明軍は北走する元軍を追って活発な軍事活動を展開したが、極東地域におけるその基本戦略は「遼東経略」であった。即ち、「先づ東方の満州、女直の住地を経略すると共に、進んで東蒙古の地を収服し・・・（中略）・・・その朝鮮・女直等と連絡するの途を断」つ為に始めた1372年大挙遠征は、概して結果を出すことができず、その後数年間は遠征を控え、専ら沿辺の経営に努めざるを得なくなった（和田 B2, 20）。他方で元は最後の拠点として満州を維持し、これを通じて朝鮮半島の高麗と連絡してい

たのであり、元の支配下にあった高麗にとってみれば、満州がそのまま明の支配下に入ってしまうと独立の機会も失う形勢なので微妙な立場にあった（和田 A288）。

この状況で明の喫緊の課題は、1371年1月から始まる遼東郊外長春・農安を根拠地とした反明勢力ナガチュ（納哈出）の攻勢への対応であった。ナガチュは1372年11月、1375年12月には大挙して遼東を襲撃する程強力であった。

このような軍事状況は琉球を含む周辺地域に対しても決定的な影響を与えた。「遼東経略」は縁辺部に対する慰撫もその一環とするもので、明朝が琉球に対する招諭と使節を派遣したのは1372年であった（『太祖実録』巻之七十一、1372年正月の条。以下『太71』1372-1のように表示する。年月が自明の場合は添数字を省略する）。この年の12月に楊載が瑠球國に遣わされ、中山王察度が弟の泰期等を遣わし表を奉じ方物（不明）を貢したという記事が現れる（『太77』）。

その後高麗に対して、洪武帝は1374年4月に2000匹の馬を要求した。高麗は済州馬300匹を提供することにしたが、9月に恭愍王が宦官に殺害され、11月に遼東で明への護送官が貢馬を奪って反明のナガチュのもとに逃亡する事件が起こる。

この直後に明は李浩を琉球に派遣する。1374年12月に大量の陶磁器・鉄釜等と引き換えに馬を得たが、果たしてどれ程の数の馬を調達できたかは疑問である。1376年4月に再度李浩は磁器・鉄釜と引き換えに馬・硫黄を買い付けて帰国するが馬は僅か40匹であった。但し今回は硫黄5000斤を得た。

他方高麗は元・明双方に関係を維持し続けようとし、遣明使を絶えず送り続けた。その貢物には馬ももちろんあり、1380年12月に450匹、1381年10月に933匹、1382年4月に1000匹にも上った。しかしこれらは全て明の遼東都司に阻まれ（洪武帝の拒否）明に届くことはなかった（蔭木5）。

このような経過を考えれば、この時期の明はごく短期間、高麗に代わる馬の供給地として琉球に着目した可能性はあると言えようが（蔭木2-4）、しかし獲得した成果と高麗に対するその後の態度を考えれば、この時期の明にとって琉球の馬は概して必要ではなかったと言えよう。換言すれば馬が琉＝明通交開始の主要動機ではなかった。^(注3)

文献上は、ごく初期の琉明通交は楊載が瑠球に派遣され、それに応じて瑠球国からは中山王察度が泰期に明への通航を委ねたことから始まるとされている。即ち、『球陽』によれば1372年明太祖の詔文を持参して来琉した行人（使者）楊載に対し、それを受けて直ちに察度が王弟泰期を遣して臣として表貢したと。また『太祖実

(注3) 1380年迄は、明のアクションに対応する琉球側主体は専ら中山王察度であって、回数も僅か（5回）である。それも1377年（この年の進貢は『太祖実録』に記載あるが琉球側にはない）を除けば全ての貢物が内容不明であるか数量が分からない。使者も泰期か不明である。1380年10月に初めて山南王承察度の使者師惹が現れるが貢物はやはり不明である。全体として見れば、馬が一回16匹、硫黄が一回千斤進貢されたのみ（いずれも1377年の明側史料）である。琉球全体の反応としては冷ややかだった印象が否めない。

また史料から判断する限り1383年までの琉球の対明進貢の内容は不明の年度が多いが、判明している年度ではほぼ数十匹である。意図的に琉球からの馬が多数だった年の頭数が書かれていない可能性もありうる。それにしても明が高麗からの大量の馬を拒否していることには驚かされる。広大な縁辺地域で作戦中の明にとっては千匹程度の馬はそれほど重要でなかったのだろうか。例えば1384年の記載に拠れば1371年に成都での馬3万匹をはじめ、1372年には各地で馬羊10万匹余、馬一万匹、馬羊2万匹取得などの成果が示されている（『太161』4月）。琉球馬の買い付けも明にとってどれほどの意味があったか不明である。

録』においても1372年正月の条に楊載が琉球國詔諭に派遣されたとの記述に対し、1372年12月に中山王察度が王弟泰期を派遣したと記されていた。但し『太祖実録』ではこの直後の1373年正月の条（『太78』）に琉球「諸」国が已に入貢とあり中山以外の地域との通交がこの時点であった可能性が窺える。また実際『中山世鑑』では1372年に他の「二王」も遣使したとあり、蔡鏘版『中山世譜』でも同様である。そして『太祖実録』では1374年10月の条（『太93』）になって察度が弟泰期派遣して馬を貢したとの記述順序となっている。

いずれにしても、中山王が直ちに、しかも琉球で唯一、明の詔諭に反応したとの文献上の主張には疑問も残る。また明の李浩派遣と中山が馬を進貢した（明公式史料上二度目の）泰期派遣はほぼ同時であったと考えられる。その後の展開を考えれば、中山王は琉球で最も明の政策に親和的な地域指導者であったとはいえよう。泰期はごく初期の担当者であって1377年には一定の役割を担った。しかし重要なのは1382年に至るまでの当初10年間で1377年のみを例外として、琉球から明への馬・硫黄の朝貢は明確な数量としては一度もなかったことである。むしろ明史料における1377年の貢物の量は際立って明確かつ大量で評価が困難である。

他方で明側にとっても、国家成立時に対「倭寇」及び対日本関係を構築する政策を形成する上で、琉=明通交に対する期待もあった筈である。これに関して近年、中国文献を利用して通交開始時点での状況について次のような解釈がなされている。

琉球への洪武帝の招諭はそれに先立つ日本への遣使の直接の結果である。即ち、1369年と1370年の二度に亘り楊載が派遣され、楊載は1371年10月に日本から帰国した。直後に慌ただしく楊載は琉球に派遣された。実は明当局はこの時点で琉球と朝貢関係に入れると期待してはいなかった（『太68』所収の1371年9月の戒諭を解釈して）。しかし楊載が日本で得た情報から沖縄が琉球であると知ることになった（石井3-4）。^(註4)

これも琉明通交への期待が実は大陸側にあったことを示す主張であろう。但し明側に警戒感もあった事例も示している。即ち、洪武帝は琉球を「民乱の源」と考えていた（隋の煬帝を引用した1371年9月の条にある戒諭）のであり、また、1372年の春夏の間に楊載が琉球に行く途上の福州で、福州鎮守王恭が胡翰の「楊載に贈るの序」を引用して、楊載に対して琉球（日本）による贈賄を戒めたという事例もあった、と（石井3-4）。ただ福州鎮守のこの理由から考えれば、古琉球は単なる蕃国と見られていたというよりも、明の統制の及ばない経済活動の盛んな地域だと既に認識されていたことになる。石井によれば、宮古・八重山から琉球弧に拓がるピロースク式福建粗製白磁器の流通に見られるように、古琉球には既に当時白磁を購入できるだけの資金が夜久貝貿易で蓄積できていて、それに支えられた沖縄=福建間の密貿易に使者が取り込まれるのを警戒していたのだ

(註4) 石井は漢文史料に則って琉球人は粗暴な人間だった（琉球倭寇）と考えている。「琉球人が福州に逗留して朝貢を準備していた際、福州の接待者を常に罵り殴り合っていた」とか、四川の「チベット人と琉球国人が北京の会同館で殴り合い、重傷者を出したため、皇帝が殺人罪は死刑に処すると命じた」ことなどを紹介している（それぞれ『英宗実録58』1439-8の条と『同162』1448-1の条）。海外貿易従事者に対するこのような認識は一般的で、例えば1475年に起こったこととして、占城の頭目波籠阿麻が風に流された琉球国海船の乗員を使って侵掠し、損害を被ったとの安南国王の上奏が明側史料に記載されている（『憲宗実録』巻176、1478年3月の条）。豊見山はこの記事を次のように説明している。「1475年にベトナム近海（トンキン湾か）に漂流した琉球船が、チャンパ国の頭目の軍勢に荷担して安南国を攻撃したものの、安南国側に撃退されるという事件」についての安南国王から明国皇帝への上奏文の中での言及であり、当時、圧力をかけられていたのは占城の側であったことから文面通りに受け止めることは問題」であるが、「琉球人がなぜ占城軍に加勢したのかもまったくの謎であるが、戦闘活動に参加したことが事実とすれば、漂到した琉球人らが単なる交易活動にのみ従事する商人的な存在などではなかったことを示す事例」（豊見山47）だ、と。

と言う(石井8)。

石井に拠れば、この時期の楊載来琉は実は壮挙だったのであり、胡翰でさえも沖縄と台湾を区別できていない。要するにこの時期、福建側よりも琉球側が航路を熟知し、船隻も擁していたという判断である(石井6-8)。

B) 自由移動商人亜蘭匏の登場(1382-1383年)

古琉球時代に大陸との初期通交を担った代表的人物として亜蘭匏は明史料で最初次のように現れる。

「1382年2月に琉球國中山王察度がその弟泰期とその臣亜蘭匏等を派遣して表を奉じ、馬20匹と硫黄20(2000)斤を進貢した。察度は織金文綺紗羅12疋及び帛を得、泰期と亜蘭匏等は綺帛を得た。路謙が派遣されて使者を國に送った(『太142』)」。

ここから判ることは前後の経過を考えると、当初から琉明通交関係の事実上の当事者だった泰期が、この時から亜蘭匏に主役が交代したということになる。ところで、この条文に言う路謙が送った使者とは誰のことなのか。この明史料においては、亜蘭匏は臣となっていて察度(もしくは泰期)の臣であるように表現されているので、使者は泰期を指すようにも思える。もちろん単数・複数を考慮せずに亜蘭匏等一定数の陪臣も合わせて指していると解釈することも可能ではある。

琉球側の史料ではどう表現されているだろうか。蔡鐸版『中山世譜』ではそもそも1382年にこの渡航はない。蔡温版『中山世譜』では1382年の項に陪臣として亜蘭匏等が現れるが、路謙に送られた人物については泰期等とあるのみである。この「等」は蔡温がはっきり分からないので、こう書いたのではないだろうか(そしてこの『中山世譜』ではこの記事に続いて路謙が琉球での三王争乱を知ったことが示され次年度への繋がりが明らかにされている)。「球陽」では1382年の項に「貢使泰期等」とあるので微妙である。そもそもここには亜蘭匏の名が出てこない。亜蘭匏が出てくるのは翌年1383年の元旦表賀の遣使においてである(ここで三山論知が記される)。

要するに、明示されていないが『太祖実録』を厳密に解釈すれば、亜蘭匏については帰路については自力で戻ったかのようなようである(使者が泰期であったとして)。そうであれば亜蘭匏は自由に明との間を往復できる人物であったことになるし、実際そうであったろうと思われる。

次年度の琉球からの使節は、亜蘭匏に山南王承察度の臣も加えた二人に代表されるものとなり、しかも琉球内の内乱を示すものとなる。即ち、まず明史料1383年正月の条に「琉球國中山王察度は臣亜蘭匏を、山南王承察度は臣師惹等を遣わして表を進め馬と方物を貢した(他にも来賀使あり)。(『太151』)」とある。ここでは察度の臣は亜蘭匏一人なのに、承察度の臣は複数いることが判る。また山南王の積極性と共に、亜蘭匏と承察度の複数の臣の間に連携可能性も含め一定の関係があったであろうことが想像できる。

今、この二つの条に示される二年に亘る動きを沖縄側史料の内容も加味してまとめてみよう。

1382年来琉した路謙が1383年正月の中山王の元旦表賀を護送し(蔡温版『中山世譜』に準拠)方物が貢された。また山南王もこの時参賀した。それに対し明史料によれば、同じ正月に洪武帝から両王に全く同等の賜物(鍍金銀印等)、亜蘭匏等への賜物(文綺等)及びその他の来賀使達への賜物もあった。しかし琉球側史料では、山南王に対しての鍍金銀印は記されない。また亜蘭匏への賜物も記載されていない。中山王にとって、山南王は格下に扱い、亜蘭匏と山南使臣には触れたくないかのようなようである。

続いて洪武帝は当時琉球國三王が覇権を競い攻撃しあっていることを戻ってきた使者(琉球史料で路謙)か

ら聞いたことが記される。そこで亜蘭匏等を国に還らせ、また使者（琉球史料では梁民と路謙）も派遣し中山王察度に対して勅言し、また山南王承察度と山北王帕尼芝に対してもやはり諭した。『球陽』によれば詔諭は二通あり、一通は中山王宛で一通は山南・山北の二王宛であり、いずれも戦乱を戒めたものであり、三王はそれに従って争いをやめ、報恩の遣使をし、太祖は三王に衣幣を与えた、と記されている（1383年の項）。蔡温版『中山世譜』では路謙が護送してくれたことを謝したことが記され、また詔諭の内容（明史料にあるものと同じ）が記されている。三王が了承したとあるのも『球陽』と同様である。^(注5)

まとめると路謙は1382年明から琉球へ行き、年賀使を連れて明に戻る。1383年に亜蘭匏と共に太祖の詔を携えて琉球に渡り、報恩の遣使を連れて明に帰ったことになる。いずれにしても琉球から明への往路は明に頼り、琉球からの使者は亜蘭匏が導引し帰国させたということになるのか。

琉球側史料では山南王に対する明側の待遇が省略もしくは軽視されていることを考えれば、明の意向に対する他の二山の反応が覆い隠されている可能性が高い。また中山の中心人物とも言うべき亜蘭匏が無視されているのも奇妙である。1382年の亜蘭匏使節の訪明、1383年の帰琉が琉球各地に政治的波紋を引き起こしていることがその後の動きで示唆される。いずれにせよこの後3年間、明の記録から亜蘭匏の名は消える。

他方で「三王」名義の朝貢は名前の不明な使節が多いながらも1384年まで頻繁に継続し、それぞれ同程度の頻度（2回ずつ）で行われることになる。即ち1383年12月には山北王帕尼芝が臣摸結習を派遣して方物を進貢し衣を与えられている（『太158』）。結果から見て亜蘭匏は泰期から始まる琉明通交を「三山」に拡大させた当事者であることになる。1384年1月には琉球國中山王察度、山南王承察度、山北王帕尼芝、暹羅斛国王と並んで雲南・四川・湖広の曾長達が遣使・進貢し、それぞれ文綺衣服を賜与されていることも記述されている（『太159』）。

1384年のこの条の記述からは「三山」の動きが明王朝周辺諸地域の対明外交と同期していることも分かる。上述の諸地域が同列に併記されているからである。但し、扱いに差があったことも記されているが、具体的な差については判らない。またこの条からは、明が琉球「三山」をそれぞれ独立国とは認めていないで、琉球国内の地域政権と扱っていることが明確に示されている。上述の周辺諸地域の中で国として扱われているのは琉球國と暹羅斛國だけである。そして実は、明王朝をめぐる遣使の動きは琉球・大陸西部地域だけでなく、北東アジアともほぼ同期している。即ち、すぐ後の1384年6月には遼東の野人女直もまた来明し縞帛布と鈔を賜って

(注5) 拙訳すれば中山王に対して「朕は（中山）王の至誠を喜び、路謙に命じてその誠意ある礼儀に報いたのであって、何も再び使者を送ってもらって来謝してもらうことを期待するわけではない。しかし路謙から聞くところによれば、三王が互いに争って、農をダメにし、民を傷つけているとのことである。朕はこれを不憫に思う。戦いをやめ民を休息させた方が国のためによからう」と言う。また二王に対しては「琉球国王察度に続き山南王承察度もまた人を派遣し、使者に随伴して皇帝に参内・謁見させたのは高く評価できる。しかし最近使者から聞くところによると、琉球の三王互いに争って農業を廃棄し人命を傷つけているのは不憫である。今、使いを派遣して二王に諭そう。二王は兵を引き民を涵養するのがよからう」と勅した。この文章自体の評価としては、明の三山に対する扱いが同等というよりも、ニュアンスが異なる扱いをしているといった方が正確かもしれない。どちらかというとも最初に接触してきた中山王察度に対しては、亜蘭匏を調停役として帰国させるがそれに答えてもらう必要はないということだから、最も尊重はしている（三山の中で特に中山との）通交自体に積極的だとは言いがたい。他方で、最も積極的に接触してきた山南王に対しても、中山王に対する扱い以上のことは述べていない。山北王についてのことは最も軽く扱っているようにも見える。

いる。こうした遼東の動きは勿論明の遼東経略が成功しつつあることによるものである。^(注6)

亜蘭匏自身の動きは琉球史書の上では琉球に留まるように見えるけれど、明朝の政策展開から見れば、琉球を含む東アジア・東南アジア全体の政策の一環であろうことが垣間見える。亜蘭匏自身も明の国家形成期の各機会を通じて、明（金陵）の周辺地域で活動する人々と少なくとも情報交換できる人物であったろう。

いずれにしても史書の上では、出現した亜蘭匏はごく短期間（二年しかも貢物の数量が明確なのは一度）だけの明への貢物運搬者であり、それ以上の貿易の担い手ではないように見える。しかし、ここに現れているのは進貢物のみなので本来重要なはずの附搭貨や私商物についての情報は無い。この隠れていた問題は亜蘭匏の再出現に前後して表面化する。

C) 二度目の亜蘭匏（1386-1387年）と暹羅國の南海物資入貢（1386-1389年）

三年の空白の後、『明実録』1386年1月の条に再び亜蘭匏が124匹の貢馬、硫黄11000斤（琉球史料では12000斤。1000斤はどこに？）と共に現れ、太祖から宴会と紗を得る（表賀である一方で前年の海舟賜与と関係あるかもしれないが、琉球史料にはそのような表現はない）。明朝廷（おそらく金陵）での宴会は単なるパーティではなく情報交換の場であった筈である。前年の海舟賜与は多頭数の馬と多量の硫黄の進貢を容易にした筈だが、以後の進貢に琉球からの進貢馬の頭数が増えた形跡はない。むしろ大きく減少していると言った方が良い。それでもこれ等の物資が進貢物とされていることは、この時期の亜蘭匏の活動が依然明の遼東経略に関連しているものと推測される。即ち、遼東を脅かしたナガチュの勢力は1386年冬から1387年6月にかけての明将馮勝の大軍遠征によって駆逐され、この結果満州・東蒙古の形勢が大きく変わることになった（和田 B24）。戦わずに投降したナガチュは海西侯となる。他方明は逆に高麗に対して11月に朝貢禁止とした（陰木10）。この戦いが明の大勝に終わったことが、従来元と朝鮮半島の通交を媒介していた満州が明の支配下に入り、高麗は明の支配圏に入る結果（李氏朝鮮の成立）をもたらしたのである。

亜蘭匏の対明活動は引き続き琉球各地域の動きを先導している。1386年に引き続き1387年2月に再び亜蘭匏が

^(注6) 『太162』1384-6月に「兀者野人酋長」等15人が遼東より来帰と記録されている。「兀者」は現代の中国語辞典では Wu-zhe であるが、文献では「我着 Wo-cho」と「吾者 Wu-che」と「Wu-che」は松花江流域の女直の呼称である。「吾者野人」と同じではないかとされている（和田 B127）。明は対モンゴル政策の一環として女真族を利用し、部族ごとに衛所制を編成、部族長に官職を与え、それを示す勅書・印璽を与えて間接統治を行った。部族長に対しては朝貢・馬市に関わる特権を付与したが、それが女真族の内部に熾烈な抗争を産んだともいわれる（石橋 64-67）。他方で、既に元代の北京地誌には、サハリンにおいて「野人」というツングース系の人々がアイヌと冬の毛皮（オコジョ）を交易し、それは14世紀のフィレンツェ商人の著した商品リストに千枚単位で売買されるものと掲載されているという。サハリン住民は、モンゴルと中国の巨大な毛皮需要に刺激を受けた。この際「野人が交易した中国の物資とは、元への朝貢の見返りとして下賜されたものであり、その中には絹織物もあった」。これらの品物は北海道南部の館の支配者を経て安藤氏のもとにもたらされた（中村72-73）。ユーラシア大陸の東部と西部の交易の繋がりが、日本にも既に広がっている事実を示すものだが、大陸南部・琉球を繋ぐ回路がここに形成されていく状況が示されているとも言えよう。また「女直」「野人」についての記述は1385年の『太175』にも現れている。いずれにしても、印璽などの特権的地位を地域の有力者に与えて通交の手段とする中央・北アジアの状況は、当時の琉球と明の関係に似ていないだろうか。明朝国家成立期の琉球・先島内における当時の激しい抗争と、それに対する明の朝貢体制のあり方に興味深い類似が見られるのではないかと。「この時期のアイヌと和人、アイヌとニヴフ（旧称ギリヤーク）の混じりあった状況を「北の倭寇」とよぶこともできる」（中村73）と表現されている。

現れて察度遣使として37匹程の馬等との引き換えに鈔を得たが、約10ヶ月の間において山南王承察度、叔父汪英紫、山北王帕尼芝の遣使も幾分の馬等を進貢する。しかしこれ等は、南シナ海及び東シナ海を巡る当時の動向から見れば、表面上の出来事であった。

亜蘭匏の1386年の入貢は、その後の琉球各地域の対明通交に大きな変化をもたらすものとなったと思われる。即ち、この直後の『明実録』2月の条に高麗国王からの馬1000匹等と共に、暹羅国王の遣使が胡椒・蘇木・乳香を入貢しているのも記載されている（『太177』）。この時亜蘭匏が南海物資を知った、或いは暹羅の商人と直接に通じる機会を得た可能性がある。更に上に見たように、その僅か後に一挙に山南、山北の遣使三人が訪明しているため、この時を境に一挙に南海貿易の経路を開く機会を琉球本島各地支配者が認識した結果だと考えられる。そして沖縄内部だけでなく南海物資の産出地である暹羅国もほぼ同時に顕著な動きを見せている。これは明朝内外での商業・外交活動（史料から直接見えるのは宴会）が重要な役割を果たしていた証左でもある。

（注7）

この時期に明の側でも進貢物自体の必要性に変化が生じたと思われる。一つは一挙に明の支配地域拡大に向かう遼東の軍事情勢である。これは直接には馬の需要を減少させたと思われる。即ち、1387年に大將軍馮勝が20万人の大軍でナガチュ（納哈出）の本営を襲い、遼東・満州におけるモンゴル勢力を一掃した。更に1388年3月に15万の大軍を率いて出発した大將軍藍玉は4月にモンゴル高原東北部のブイル・ノールで元帝トグス・テムルの本営を襲い、彼の次子ティポド（地保奴）と妃・公主たちを捕虜にした。この戦いでは捕虜男女十万人、皇子妃嬪悉くが捕えられたといい、捕獲した馬は15000匹に上ったともいう（和田 A288, 310-312, B24-29参照）。明の応天府に着いた彼らは金印と金牌を献上し、代わりに鈔200錠を与えられ命は救われた。しかし藍玉が地保奴妃に私通したことを洪武帝は激怒し、その結果妃は自殺した。

この事件は古琉球にとって興味深い事実を明るみに出した。即ち、捕虜の地保奴がこの成り行きを聞いて恨み言を言ったことを洪武帝は聞きつけ、彼等を琉球まで護送し資金まで与えたのであった（『太192』 1388-8）。琉球のどの地域に元の捕虜が連れ出されたのか、そしてこのことはその地域にとってどのような意味を持ったのかは謎のままである。しかし次の点は考慮に入れる必要がある。

即ち、この明軍大勝の際に、サマルカンドの商人も満州で300人余りが明の捕虜になったと言われる。この地は北東アジアの極辺ではあるが、中世にあっては北方民族の通商権益は殆ど中央アジアサマルカンド方面の商人が独占していたと言われ、特に元朝支配時には漠北の財政を一手に引き受けていた。彼らは東洋のフェニキア人とも言われ、その文字と言語は一種の国際語ともなっていたのである。マルコ・ポーロ等もこの北方の交通路を往復したのであった（和田 A274）。これらの捕虜達、特にサマルカンドの商人達はその後、どういう運命を辿ったのだろうか。地保奴に同行した者もいたのではないだろうか。いたとすれば彼らは琉球のどこへ行き、どのような活動をすることになったのであろうか。

琉球史料『球陽』も、この年に明主が捕虜の元主である地未奴を琉球に配流したと述べている。事実のみが明らかにされるにとどまっている。しかし地保奴が琉球に放逐された直後の1388年9月に、中山王察度と北山

（注7） 暹羅國が明に蘇木・胡椒を進貢したのはこの時が初めてではない。小葉田401-402によれば、洪武年間では1372年、1374年、1378年、1386年、1387年、1389年に蘇木（時折胡椒も）が明にもたらされている。しかし目を引くのは1386年から4年の間、毎年入貢があり（1388年は象・番奴等の進貢）、1387年7月に至って胡椒一万斤、蘇木十万斤の大量が記されている。

王帕尼芝は新たに甚模結致（儀間結致）を遣使として馬を貢する（『太193』1388-9）。地保奴の古琉球移住はおそらく少なからぬ影響をその地にもたらしたと想像される。もしも直後の二王の対明進貢がその結果だとすれば、配流先の古琉球で遠隔地商業取引が活発化する要因になったのかもしれない。

明朝にとっての進貢物自体の重要性に関するもう一つの変化もこの遼東戦争時期に起こっている。即ち明にとっての硫黄は、それ自体が必要物だと言うよりも戦略的に管理することが重要なのであった。そもそも硫黄は大陸で産出可能であり、本来はむしろ硝石（焰硝）の動きを管理することが必要とされていた。

即ち、文献によって説明を加えると大略次のようなことである。「(黒色) 火薬を作成する場合焰硝と硫黄とが二大組成物質となるのであるが、とりわけ焰硝の占める比率は、硫黄のそれを上回っている」。「極端な数字であるが、硫黄は最低3%でも「正常な燃焼」が可能である」。「硝石は中国の北方に多く、特に四川、山西、山東が代表的な産地」であり、外国産硫黄に頼る必要はなかった。しかし明は「長城の北の地域に硫黄が入ることを警戒し、厳禁した」。それは硝石の産出しない日本が硫黄のない北狄の地に向けて、日本が必要とする硝石と引き換えに日本産硫黄を密輸出している可能性があったからである（太田311-2, 318-9, 324-5）。このような状況下では琉球産の硫黄も明は統制下に置きたい筈であり、朝貢物と指定したかったのであろうと推測できる。

他方で、既にこの遼東戦争期には「火器技術が明朝から周辺地域に伝播し、東部アジア全域が「火器の時代」の第一段階に入」っていたと評価されている。「これとともに火薬貿易の範囲と規模も大きく拡大した。特に明朝では、14世紀末には全軍に12万～18万もの火器が配備されていたといわれ、火薬の消費量も膨大だった」。なかでも「明朝の周辺諸国のなかでも、もっとも早く中国式火器を導入したのは朝鮮」であった。「高麗末期の1370年代には、明朝から硝石と硫黄を給付され、また華人から人口硝石の製造法も学び、火器と火薬を製造して倭寇対策に活用した」（中島301-302）。そして「王朝末期に火薬技術を会得した高麗は、明朝を通じて硫黄と硝石を入手していた」が、琉球からも「高麗王朝最末期に使者を派遣して硫黄300斤などを献上したという記録」（山内15）が高麗側にあるとも言われ、琉球と朝鮮半島が硫黄を介して繋がっていた一端を垣間見せている。

ところで、このような軍事物資を琉球から朝鮮半島に運んだのはどのような人々であったのだろうか。14世紀末になると明が規制しているのが知られている。例えば、1397年完成の『大明律』に「馬牛、軍需、鉄貨・銅銭・段匹・紬絹・絲綿を、私に外境に出して貨売」及び「人口・軍器を出境、下海」の禁止が記載されている（中島303）。しかし、この時期ではまだかなり自由に頻繁に往来されていたろうと推測してもおかしくはない。遼東の地保奴が琉球に移住させられた背景には、このような人的通交があったのかもしれない。

D) 三度目の亜蘭匏と私貿易の露見及び「山南」の躍動 (1390-95)

明の史料によれば、1390年になって中山王察度と遣使亜蘭匏が年賀の貢物として従来からの馬・硫黄に加え、南海物資の胡椒500斤と蘇木300斤を初めてもたらす。同時に王子武寧も馬・硫黄と共に胡椒200斤と蘇木300斤を明にもたらした。山北王も使節を送り馬・硫黄を貢した。しかし同時に中山王の送った通事である屋之結と言う者が附搭貨として胡椒300斤余り・乳香10斤を持参し、守門者が検査してこれを得た。直ちに没収されたが、太祖の命で全て返還されると共に屋之結等60人に鈔一錠ずつを下賜された（『太199』1390-1）。

この1390年の対明進貢の内容は、胡椒・蘇木の初進貢及び大量の硫黄など、従来貢物に比して特に目を引くものである。しかしまた表賀主体に「三王」が同時に胡椒・蘇木を持って関わっており、更にその上「王子」までも通交主体に出現し、従来表面的には散発的な琉明通交からは大きな変化を見せている。そして特に通事屋之結の行動に関する記載からは、朝貢に名を借りた商業活動の盛況が史料上に始めて垣間見える。

しかしこの直前の亜蘭匏はどうしていたのだろうか。文献史料上における亜蘭匏の空白期（1387年から1389年）は、暹羅商人と古琉球商人が出会う時期に相当する。小葉田435は1387年前後を琉球＝暹羅通交の開始時期と推定している。小葉田の推定は次のような根拠に基づいている。即ち、暹羅国は1391年7月に高麗に使者（華人とされる）を派遣して通交を試みたが、その使者の言うには1388年に命を受けて暹羅を発ったが、日本に一年程滞在してから高麗に着いたと言う（『高麗史』小葉田429より）。従って彼等はより近い琉球に対しても積極的に通交を試みた筈である。そして同じく『高麗史』によれば、1389年8月に中山使玉之が蘇木600斤・胡椒300斤を高麗に進貢したとあるので、琉球は対明に先立って南海物資を手に入れていたことになる。

この1387年から1389年こそ宮古島史においては与那覇勢頭が中山進貢した時期に相当する。真佐久（マサク集団）の活躍した時期である。換言すれば南シナ海・東シナ海・日本海を繋ぐ通交ルートが大陸周囲に成立しつつあり、この中で宮古・八重山は一定の役割を担ったと思われる。しかしこの点の考察には単なる進貢物に留まらず、大陸との私貿易の動向が重要である。

元来、明の周辺地域にとって大陸との通交は陶磁器を入手することが進貢に隠れた大きな目的であった。そしてこの際の中心的役割を果たしたのは、進貢使と随員であった。明からの使節・随員はもちろん明人（閩人）であったが、琉球からの使節・随員は琉球人によるところが大きかったろう。彼等は積極的に陶磁器入手に活動したと言われる。それは市舶司においてのみならず、内陸部にも入って活動した（亀井48）。しかし、この1390年1月の条で『明実録』が示している「守門者」とは誰なのだろうか。どのような役割を果たしていたのか。いずれにせよ「三山」関係者という肩書を使って多くの私商活動が行われていたことがここで明らかにされている。

特に明の史料からは、琉球国山南王承察度がかねてから活発な対明通交を試みていることが判る。既に1380年10月の条（『太134』）に、臣師惹等を派遣して表を奉じ方物を貢して大統暦を得たとあった。また承察度は1383-85年の3年連続使者を送り（1383年使者亜蘭匏『太151』。1384年『太159』。1385年『太170』）、1383年と1385年の2回に亘り王印を下賜されたという指摘もある（孫38-9）。1387年10月には耶師姑を遣使とし（『太187』）たが、中断を挟んで、1391年9月には山南から耶師姑と壽禮給智等が遣使として貢した。但しこの時には王叔汪英紫によって派遣されている（後述）。しかも高麗の王瑤が派遣した趙俊と相並んで明史料に記録されている（『太212』）。1392年12月には承察度が山南王として南都妹を遣使として方物を貢している（『太223』）。

沖縄側の史料は明史料に対して興味深い取捨選択をしている。まず屋之結という通事が付搭貨である南海物資の密売（私商）を行ったことが明史料からは知ることができるのに対し、琉球史料ではそれが史料に現れない。即ち、蔡温版『世譜』では1390年の出来事としては庚午に通事屋之結が王に表賀派遣されて方物を貢した、また世子武寧が馬・硫黄・胡椒・蘇木を貢したことは記されているが、明史料後半に記載の彼の私商のことは省かれている。これに続いて日付なしの本年として宮古・八重山の中山への入貢が挿入され、これによって「中山始強」となったと謳っている。1390年はこれで終わりである。1390年は年度として庚午なので『世譜』からは日付は分からない。他方『球陽』ではまず宮古・八重山の来朝入貢が記された後に、王使が元旦表賀に遣わされ方物を貢し、世子武寧が馬・硫黄・胡椒・蘇木を貢したとなっている。『球陽』によれば、そもそも通事屋之結は存在しない。1390年は宮古八重山始めて来朝入貢す、で始まり、次に王使の年賀と世子武寧の馬・硫黄・蘇木・胡椒入貢で終わる。従って亜蘭匏も存在せず、今回の主要な貢物は武寧が行っている。

要するに沖縄側の公式扱いでは、亜蘭匏は存在せず、通事屋之結は存在しないか、形の上で貢物をしただけの人物になっており、胡椒・蘇木の南海物資は世子武寧遣使が明に貢したのである。そして通事屋之結の私商

の話はないことになっている。亜蘭匏についてはこの年には記されないが、蔡温版『世譜』においては1391年に中山王と世子二人の使節の内の一人として登場し、1394年には王位冠帯を得て王相となって現れる。『球陽』では1391年には現れないが、1394年には中山王に派遣されて王位冠帯を明から得て王相扱いされる記載がある。そしてこの年の附記として与那覇勢頭豊見親についての詳述があり、中山への宮古・八重山の忠誠を記している。いずれにしても亜蘭匏はもはや中山王の対明使節としては1390年代には存在しないのである。他方、明の『太祖実録』では亜蘭匏は1395年まで断続的に出現し、最後は1398年の使節の一人で終わっている。即ち、1390年察度使節、1391年察度と武寧の使臣の一人、1394年察度と承察度の臣及び琉球国使臣、1395年察度使節、1398年察度使臣の一人、としてほぼ14世紀終わりまで活動している（但し察度は琉球史料では1395年に死去）。

両史料に見えるこれらの違いは沖縄国内の政治変動を反映していると考えられ、更にはその背後にある商業関係の変化が関係していると考えられる。琉球使の密売・私商という海外活動及び亜蘭匏の存在が、中山と他の二山特に山南勢力との関係の変化に深く関わっている。

2、亜蘭匏の中山化と陶磁器商人の大陸拠点移動（14世紀末から15世紀初）

A) 朝鮮半島と古琉球の社交

前項で見た1388年の明史料からいくつかのことが推測できた。一つは初期の明朝にとって古琉球は流刑地に近い扱いだった可能性である。そして古琉球内には何らかの形で元王朝の残党を受け入れる素地があった可能性である。

そして『朝鮮王朝実録』（『李朝実録』）太祖3年（1394年）9月の条（『太祖実録』巻6）に、琉球国中山王察度が被虜男女12名を返還し在逃中の山南王子承察度を送り返すよう求めた、とある（『朝鮮王朝実録琉球史料集成訳注編』池谷望子他編訳31-32）。当時の沖縄と朝鮮に少なからぬ政治・通交関係が存在していたことが示されている。その背景にある一要因、例えば硫黄取引については**1-C**）でみた如くであった。この記事は古琉球内部で中山に敵対勢力が存在していて、他方中山王察度と李氏朝鮮の間には友好関係が成立していることを直接に示している。^(注8)

明史料によってこの前後の出来事の推移を見よう。この以前では、1394年2月に山南王承察度と中山王察度は亜蘭匏等を派遣し、馬・硫黄・蘇木・胡椒等を買している（『太231』）。そして1394年4月に亜蘭匏が琉球国王相に任命され朝貢のため上京する（『太232』）。この時点では中山王察度と山南王承察度は亜蘭匏を介して共通利益を得ているように見える。

この以後をみると、亜蘭匏はその後も馬・硫黄の対明進貢を続け、南方物資についても1398年3月に中山王察

^(注8) 伊波普猷は承察度の亡命について、中山王察度が「倭寇か何かにはさらはれて来た朝鮮人から聞いて、初めてわかったことと思はれます」（伊波503）と推定している。更に、これは承察度が甥の三五郎尾を明に留学させた1392年以降の筈なので、「1394年に朝鮮人が漂着するまでは彼の行衛は全く知れなかったことと思います。この消息がわかって、中山王察度は早速使を朝鮮に遣はして、その引渡し方を交渉してゐます」（伊波505）と詳述する。ただ、伊波の言う「朝鮮人漂着の事実」とそれに対する「察度の緊急対応」という事実は、本当にあったのだろうか。どの史料に依拠したのか示されていない。むしろ海外からの漂着によってしか情報は伝わらないと考ええるのは、古琉球に対する正当な認識とは思えないのだが。

度の使として胡椒を貢している。この時には世子武寧も同じ貢物をしている。そして亜蘭匏は鈔を賜り、察度はかつて願い出ていた中国冠帯を賜るという特別の扱いを得ることになった(『太256』)。この経過からは亜蘭匏が蘇木・胡椒といった南海物資の進貢によって自らの立場を強化していくが、山南王との関係は微妙に推移しているように見える。^(注9)

朝鮮史料でこの間の変化を探ると1398年2月の『李朝実録』に、「琉球国山南王温沙道が臣15人と共に中山王に国を追われて晋陽に来寓す」となる(及び10月の記事では死亡したことが記されている)。ここから承察度と温沙道の関係が従来より問題とされてきたが、これについては次項で宮古島史家稲村賢敷の解釈を示したい。いずれにせよ1398年迄には、古琉球内の敵対的抗争の際に朝鮮半島が逃避地になるくらいのある意味密接な政治関係を持つ領域が、古琉球から朝鮮半島に広がる広大な領域の間に存在していたということの証左である。

そして明の従属政権である李氏朝鮮成立後の1394年時点での中山王の1398年の依頼は、山南王子が沖縄内の反体制派であった、或いは元朝残存勢力と関係していた可能性さえも示すものかもしれない。全体としてみて、琉球＝朝鮮の政権同士が連絡を取り合ったというこの時期に、東シナ海の南端を代表する勢力として沖縄は中山王を中心に明朝体制に包摂され始めたと言えるかもしれない。この中に亜蘭匏がいる。

B) 古琉球商人活動の泉州から福建への重心移動と明の対応

しかし琉球＝朝鮮領域に生じた古琉球の明＝中山化を示すこの事件の背景には、明の陶磁器をめぐる琉球商人の動向がある。明から琉球にもたらされる陶磁器はほとんどが大陸市舶司における民間上陸地点貿易で、一部が金陵の京師会同館で求められたものであった。民間交易品は公的な記録に直接残らないが、その取引方法によって、沿途貿易と密貿易によるものに分類されている(亀井764)。

これに関して『明実録』1404年5月の条がかねてから注目されている。そこには、明の礼部尚書李至剛が、「琉球国山南王の遣使が方物を買したが、処州に行って磁器を市場で購入した。違法なので逮捕して罪を問うべきであると奏上した」。これに対して、永楽帝は「遠方の人はい実利を求めるだけであり、禁令を知らない。朝廷は遠方の人を歓迎すべきで罪を問う必要はない」と言ったとある。またほぼ同内容が『蔡温版『中山世譜』(或いは『球陽』武寧王9年)にある。但し、琉球史料は上の『明実録』よりも琉球側について幾分内容が詳しい。咎められたのが汪応祖の謝恩使を勤めた使臣であったと具体的に記載している。但し、正しくは謝恩使ではなく請封使であったこと、またここでの「処州」とは、現在の麗水であり、特定の龍泉窯地域を指しているのではないという二点が現在では注釈されている(野口71、亀井764)。

1390年に続いてここでも官僚による不法取引の摘発があったことと、それに対する皇帝の赦免があったことが記されている。しかしこの条文は、陶磁器貿易についての従来からの私貿易が立地転換している状況を反映するものであるようだ。それは泉州から福州への貿易取引中心の移動である。

(注9) 1398年から1402年は明史料に重要な欠落がある。1398年以降の数年間の出来事に就いては全く判らない。そしておそらく現存の史料は永楽帝体制に不都合な部分が全て削除された後のものである。鄭和の軍隊が琉球にもやって来て、歴代宝案にも影響したとも指摘されている。そうであれば確かに「琉球と中国との通航は明の太祖に始るといえるのは信用できない」し、「中国と往来する船は、察度王以前からあったもので、それは必ずしも和寇ではないだろう」(渡口 B29)。いわゆる冊封船と倭寇の二分類で当時の古琉球を捉えることも現存史料の絶対化と言えないだろうか。

即ち、当初の琉球からの「使臣は実質的に華人、多くは閩人であるので、地理には明るく、交渉は比較的容易と推察でき、かれらはまず港付近の牙行と接触し、行賈に同行して窯場に行く」というものであった。この場合は「購入した青磁の泉州までの運搬など行賈に依存」していた(764)。しかし「琉球の使臣は市舶司の市に座して荷の到着を待っていたのではなく、より積極的な商業活動を行なう者も存在していた(763)。そういったなかで進貢船は「永楽初年の、15世紀の初頭から福州に入港」するようになっていき、「琉球使臣は永楽初年を境として泉州を見限り、福州に活路を見出そうと試みたのであろう・・・(中略)・・・永楽初年には市舶太監府は福州にあり、貿易実務の実権は泉州には存在しなかった」(758)。1404年の記録が示す状況とは「福州においても処州窯青磁を大量に集荷することは・・・(中略)・・・かなり困難な状況が生じていたと推定される。市舶司で座して荷を待つのではなく、泉州よりも近い福州から閩江を遡上して・・・(中略)・・・自ら窯場へ買い付けに赴き、かき集めるかのごとく処州青磁を求めざるを得なかった琉球使臣の姿」である(758)。(注10)

ところで陶磁器は明だけでなく暹羅国においても生産されていた筈である。古琉球域では暹羅産陶磁器を得ることはできなかったのだろうか。これについては14世紀後半から15世紀前半にかけての時期に限定されるが、今帰仁グスク跡と博多遺跡群から共通して見られるサワンカローク窯製のものがあることは認められている。それはこの時期「博多が暹羅一琉球の(陶磁貿易の)延長線の終点にあった」ことを示す一例だと評価されている(亀井756)。

しかし明体制の内陸深く琉球商人が取引に入り込んだという事実、そして許可されたという事実は、明の経済政策の重要な一面も明らかにしている。元々青磁の製造については明朝国家の成立した頃に、「釉薬の下に青色で画く事が始まって、14世紀末にこの青色の磁器は暹羅へ齎された」(小葉田452)とされている。しかし明からの輸入増大で暹羅斛の磁器(スコタイ磁器)はやがて凋落することになった。この衰退には幾つかの原因がある筈である。他方で琉球は「遅くとも15世紀初期には、磁器を官買し、時に優秀なものを撰抽し」ていて、これが明磁器の広範囲な周辺地域への輸出に貢献したとも評価されている。従って琉球の仲介磁器貿易こそが明の輸出増大、タイ磁器の凋落を招いた可能性がある(小葉田453-455)。であるとすれば、山南商人の大陸における買付は決して惨めな姿というわけでもなく、明当局もその努力を歓迎していた商取引だっただろう。いわば琉=明共同の国家政策で明体制を周辺地域に拡大していく方向を示していたのではなかろうか。このことが琉球国家統一をもたらす経済的一因だったのではないだろうか。

例えば、この(『明実録』1404年4月の条) 礼部尚書李至剛の上奏に引き続く9月の条に次の記載がある。「福建布政司が暹羅國の遣使が琉球と通好しようとして漂着したことにどう対処すべきか待命したのに対し、永楽帝は礼部尚書李至剛に指示して言うには、暹國と琉球が修好するのは良いことである。布政司は舟を修理し、暹

(注10) 以上は亀井の考察の紹介であり、括弧内の数字は引用頁を示す。また制度としては、1370年に泉州に置かれた市舶司が1374年に一旦廃止されたが、1403年に福州(福建)に復設され、1405年に来遠館となった。「泉州は遅くとも15世紀はじめには商業都市としての機能が衰えていたと推定される。しかし、泉州衰退の重要な理由は「(かつて)泉州は華南の貿易陶磁器の集散の都市としての機能を果たし、北の龍泉窯、西の景德鎮に代表される窯場と商品流通のパイプが結ばれていた・・・(中略)・・・しかし15世紀に入ったころから処州窯の陶磁器生産に凋落の兆しがみえ始め、くわえて福建省内の陶磁器生産は南宋から元までは盛業していたが、明代にはいとこれまた急速に衰退した」。従って商業取引中心の「泉州から福州への移動は、閩江を利しての陶磁器集荷の利便性に主に起因している」と判断されている(757-758)。

國或いは琉球に行きたければ導いて去らせよ」と。永楽帝はタイ国と南山商人の陶磁器ビジネスに積極的だったのである。

3、第四の主役：大里勢力（稲村賢敷のてどころん）

陶磁器貿易が沖縄に与えた政治的变化は、史料において特に「南山」進貢主体が複雑な状況を示していることから窺い知ることができよう。そして古琉球の時代を扱う場合には、南山を広く沖縄周辺の離島、特に宮古・八重山を含む領域の中で考えることも必要である。従来、この時代を考えるには「三山」の対立史ではなく「東海岸から西海岸へ」と考えた方が良いという指摘がなされたことがあるが、ここではむしろ琉球史料にある「南山」領域を広義に解釈して考察する方法を取る。これには稲村賢敷の先駆的業績が役立つ。

稲村によれば、「三山」以外にも琉明通交を担った大勢力が沖縄本島南部に存在した。即ち、1387年から1397年の間に「五回も明国に朝貢船を送って三山同様の待遇を受けた島添大里按司」という人がいて、地元では「下の世のぬし島添大里」と謳われていた。この島添大里按司とは史料上では山南王淑汪英紫として現れる。即ち「山南王淑」は必ずしも史料の「山南王」と明確に繋がるものではない。

島添大里按司は次々に南部の有力者の城を落としていくが、得た地域に応じて尊称（名）が変わる。

彼の居城は大里城であったが、この城は「大里村の東北部佐敷村との境に近い200m許の高峻な嶺の上にあり、「城内は3000～4000坪もある広壮雄大な城郭であって首里城に次ぐ名城」で、「島添大里按司がここに拠る前から古琉球の古い城郭として知られていた」。伝説によれば、島添大里按司が占拠する以前は玉村按司の居城であった。」伝説上では、この玉村按司を滅ぼした時には彼は八重瀬按司と呼ばれ南山系だとされている。そして大里城を得てから島添大里按司と呼ばれるようになった。

彼は続いて英祖王系統の城で要害な地にある大城城を滅ぼした（1387年）が、この時は史料上は山南王淑汪英紫である（稲村8-12）。他方、それとは区別される南山王はこの頃勢力増大しつつあり、具志頭城を滅ぼしていた（具志頭按司由来記）。

島添大里按司は大城城（初代城主は真武公）を滅ぼして以後富強になったが、1397年頃に尚巴志によって滅ぼされ朝鮮に逃亡する。これが史料に出てくる1398年の山南王温沙道である。

では「南山王」についてはどうか。稲村は南山城（糸満）をその拠点と考え、青磁破片を探す。それは前項で見た1404年の「山南王汪応祖使を明国につかわす、その使臣処州に到りて磁器を市う」という記事、及び1376年の「この国俗市易に生糸、絹織物類を欲せずただ磁器を尚び」（『球陽』察度王二十七年）という記事から琉球の市場で青磁が尊重されたことが判るからである。即ち、山南王は汪応祖であり、磁器を扱って大陸まで商取引に派遣する王である。^(注1)

しかし南山城内では彼の期待に反して青磁破片を一個も見つけることが出来なかった。「南山は22回も朝貢使節を送ったにもかかわらず南山拠点に青磁がなかった」。これに対し、「支那と何等朝貢関係のない久米島の具

(注1) 「当時青磁は海外輸出を禁ぜられていた禁製品であったので、朝貢を許されていた国の使臣といえどもこれがかって帰ることはできなかった。彼等は僅かに明朝からの拝領品として青磁を頂戴して帰国することが許されていたので、これが又海外市場において青磁が貴重品扱いをされて法外の高値で取引された理由でもある」とも述べて、明国の禁制化の為に生じた貿易隘路を利用した対日取引の主体であるとする。「彼等は処州を中心とする浙江省付近又は福建地方に神出鬼没の活躍をして青磁を持ち帰り、これを堺、兵庫、博多、坊津等の日本市場に売買して巨利を得ていた」。(稲村14-15)。

志川城や、宮古の上比屋、波照間島の遺跡から拾得される青磁破片の山」がある。これらは「貿易以外のルートに依って持ち出されたと見る以外には解釈はつかない」（稲村15）、と主張する。そしてもともと、「琉球の市場で青磁が尊重された」と言ってもその地で愛用されたのではなく、日本内地向け（茶道に用いる茶器）の転売活動に使うものだった筈だという認識から、稲村は「南山」という名の下に史料には隠されたルートが内包されている筈だと予想した。^(注12)

他方で、尚巴志の拠った佐敷上城跡には多量の青磁破片が拾得され、「宮古島上比屋城跡や、八重山島仲間丘附近から拾得されるものと量も質も同じ」である。この佐敷上城に遺っている南支地方との交通の遺物である青磁類は、彼が中山王として首里に王城を移した（1406年中山討滅）後の彼の海外通交とは無関係の筈である。そしてこの量は数回や十数回の通交では持ち込めない程の大量である（稲村21）と、尚巴志以前の佐敷近辺の商取引の繁栄を強調する。

そこで稲村はこの青磁の動きを担った中山系統とは別の具体的な人物に考えを進める。「第一尚氏の背後にあって、こうした南支との密貿易や日琉間の交易に当たっていたと思はれる人にてどこんの大比屋という人がいる」と尚巴志の身内（伝説上は手登根の弟、『沖縄一千年史』では伯父）にあたる人の遺跡を示す（稲村22）。手登根のフナクブ洞には彼が福建から持ち帰ったと伝えられる「フツチャ石」がある。この石柱に関して次の類例を挙げている。宮古島久松部落の海岸にツナフツという地名があり、「ここは支那から七人兄弟が来て船のトモズナをつないだ所だ」とされていて、また「八重山竹富島の西海岸にニーラン石という高さ五尺位の石が立っている」が、それはニライカナイ神が五穀の種子を積んだ三艘の船を上陸時に繋いだ岩だとされている。そしてこれ等は「てどこんの大屋子」が唐との交通を始めてお開きになって、日本までも有名になった」とうたわれる「ふつちや小堀のおもろ」を実証するものだと考える（稲村24）。

稲村はこの史跡・伝説から『中山世鑑』・『球陽』の説明を信用できないと断定した。即ち、1372年に明国の招諭に応じて、察度が王弟泰期を遣わして朝貢したのが始めであるという通説に対して、「泰期盛は・・・（中略）・・・国交の初めであるけれども、それ以前から私かに商人の間に琉明間の交通は開かれておったので、その個人としての琉明貿易を開いたのは「てどこんの大やく」である」（稲村25）と、島尻東部の旧佐敷上城主を真実の貿易開拓者だと提言する。^(注13)

^(注12) 稲村は、勝連城跡北方最高所の物見台跡付近において多くの青磁破片を拾得する。勝連城について、「何時頃誰によって築城されたかは不明であるが、守備のための城としては難攻不落の堅城であろうし、三山時代の争乱を避けて遠く勝連半島の一隅に占拠している所などから見て、宮古の上比屋城や、西表島の租納半島にも類似する所があり、遠く海外に発展するための暫時の足溜りとして又は隠棲所として築城されたものであろうか、北方の諸部落を支配し統治するための政治をする城として造られたものとは思われない。しかし城跡から拾得される可成の量に上る青磁破片は、この城と南支地方との交通量を物語っており、城主は青磁を日本に持出して、その代償として刀剣類をはじめ多くの物貨を取り入れ」（稲村17）たと考えた。更に同様に尚巴志が拠った佐敷上城の多量の青磁破片についても南山城や大里城、首里城等よりずっと多量であることから僧と称する仲買人や倭寇の密貿易も含めた日本との繋がりを強調している（稲村21-22）。

^(注13) 稲村は「てどこんのおもろ」を見れば、てどこんの方が泰期より唐商いが先であるように表現されているとし、通説と彼のてどこん説を次のように比較する。通説は「泰期に対しては察度王の寵愛をうけて栄えた泰期盛よと賞賛しているのに対し」、手登根については「唐との交通を始めたばかりではなく、日本とも交通して有名になったと」表現されている。そして、「琉明間の密貿易に依って支那の物資は一応彼等の秘密の根拠地に運ばれて、それが適当な時機に日本に持出されて、日本の堺、兵庫、博多、坊津等の港市で高価で取引された」が、「てどこんの大やく」もその一人であった（稲村25）ことをおもろが示しているのだ、と言う。

要するに、「てどこんの大やく」一党によって、「南支地方から持込まれた支那物資は暫く佐敷城内に集積されて、彼等は又時機を見てこれを日本に売り出し其の代償として、刀剣類の武具を初め鉄製の農具を輸入し又軍糧としての米も運ばれたことであろう」。従って小城郭にすぎないが集積拠点としての佐敷城の実力は三山を凌駕していたという。このような背景があるので、1314年から1406年まで続いた「三山」の争乱も、日明私貿易を媒介した佐敷勢力（尚巴志）によって武力革命で終焉したのであった（稲村25-26）。

稲村はおそらく糸満を南山の拠点と考えた点では誤っていたかもしれない。また島尻大里按司一人が第四の主演を代表するというのも「てどこん」との繋がりが不明瞭で説得的でないかもしれない。しかし何よりも「貿易以外のルート」に飛躍したのが奇妙である。「史料に現れる貿易ルート以外」で十分だった筈である。事実上は稲村は先島地域の陶磁器調査を既に行っているのだから、沖縄本島以南の状況を知悉していた筈である。それを「倭寇史跡」と名付けたのは、彼の批判する旧来文献史料に逆の意味で囚われていたと言えるかもしれない。そしてもし大陸との貿易ルートを多角的に探るという視角にこだわっていれば、与那国島についても何らかの関説があった筈である。彼は『宮古島庶民史』において八重山アカハチ事件を中山に対する貢納拒否によるものとする点で、ほぼ琉球史料に即して考えている。実際に彼が与那国島の陶磁器調査を行ったかどうかは判らないが、もし与那国島を調査の対象外と考えていたのだとしたら、彼の先島「倭寇」論は中山への貢納経路を基準にしてのみ考察されていると判断せざるを得ない。

とはいえ、おそらく島尻南部（具志頭、大里、大城、佐敷等）において、種々の南山関係者を名乗る集団（例えば王淑とか王弟とか王子）、及び彼らと何らかの抗争・連合関係を持った人達の集団が存在していたであろう。そして、「てどこん」を筆頭に、彼らは青磁を扱う対日仲介私貿易で富を蓄えると共に、その資金で鉄製農具を獲得し、その後の沖縄本島南部の権力獲得に影響を及ぼしたということはあるのではなかろうか。

彼の見方は、琉球史料に見られる「三山」単位の衰亡史によって中山支配確立史を確認していく方法とは趣きを異にするものがある。ここでは史料に現れない第四の勢力があり得たことを稲村の努力から確認したい。仮にこれを「大里」勢力と呼んでみたい。稲村は、日本との繋がりを考えれば、沖縄本島と宮古・八重山等の離島との間に区別は無いらしいと考えている。そしてここで彼が称する「わこう」とは「三山」の領域を超えて陶磁器を運ぶ人々、密貿易者以上を意味してはいない。勿論、当時の商取引の手段として武力を持ち、時には武力行使もあり得たことは当然前提されていようが、この勢力は外部（明・中山体制）からは「南山」系統と呼ばれ、沖縄本島周辺離島及び先島諸島と一体化した陶磁器入手市場の中でその一部の（中山とは別系統の）商人集団として、日本との貿易取引活動を行っていたのであろう。「大里勢力」は先島ではむしろ「中山」より相対的に強力だったかもしれない。果たして山南國というのは沖縄本島内の一地域内の地方権力として考えるのが妥当なのか、という問い掛けも含むものである。

4、琉球＝福建航路の当時の状況と宮古・八重山の対琉進貢

A) 亞蘭匏の活動領域

琉＝明航路の進貢船に搭乗し実際に明と通航することができたのは限られた人々であったということが従来から明らかにされている。例えば、17世紀中頃の史料を利用して、「原則として久米島・渡名喜島・粟国島の住民は船に乗ることが許されておらず、乗船できたのは慶良間の人びとのみであった。・・・(中略)・・・季節や風向

きにより宮古や八重山の近海を通過したり、同地の港に寄港することがしばしばあった。両先島の行政に係わる各種文書には久米島同様に進貢船対策の規定が数多く登場しており、同船の航海運営に貢献する地域であったことが明らかであるにもかかわらず、同地の人員もまた船に乗ることは制度上なかった。島嶼ごとに役割を区別したこのような制度が何故に必要であったのかは解明されていない」（高良35-37）との考察がある。これはもはや朝貢体制が最盛期を遠く過ぎた時点での史料であるが、国家統制的なこの制度は逆に、古琉球期の琉明通交は沿海島民が広範に渡って活動を繰り広げていた可能性を示唆するものだと思われる。

これに関して、琉球近海の通航は琉球人にしかできなかったと近年主張されている。それによれば、楊載が琉球に派遣される前の1371年に日本から琉球を経て帰国したという説（1561年鄭若曾『琉球図説』）を多くの論者が引用しているが、それは誤りである。それに否定的な文献根拠として、1557年の高岱『鴻猷録』巻6「四夷来王」が紹介されている。「1370年楊載は日本に派遣された。日本王は使節を派遣し、招諭の使節（楊載ら）の帰国とともに明國に朝貢した。楊載は既に日本に派遣された後、また琉球に派遣された。1372年7月、琉球は使者を派遣し、楊載と共に明國に朝貢した」（石井31-32）。

この主張が興味深いのは、琉明間の航路についての具体的考察に分け入っていることである。即ち、通航路を琉球から大陸へ（西行き）と大陸から琉球へ（東行き）とに分けて考えている。「西行きは大陸棚を北寄りに横断し、南の尖閣を通らないのが後の歴代の通例である」。そして東から西への琉球使の朝貢は1372年の朝貢時から福建海岸在住民（梁氏）が航路を導引した有力な史料が存在すると言う。それは「船が福建沿岸列島線を超えて西側の大陸に入港する際に海岸の岩礁が曲折して危険のため、地元のパイロットを必要とする」ためである。しかし他方で福建住民は、西から東への航路について楊載を導引できなかった。西から東行きの尖閣航路では福建人ではなく琉球人が導引した。楊載の時点で「既に福州から琉球まで毎夏の使船が存在した筈である」との推測である。

この主張によれば、1372年2月、12月の楊載の琉球遣使の際、そして弟泰期の帰国の際にも琉球側の導引者が存在したことになる。その人物は泰期自身なのか、それとも『太祖実録』1374年10月の条に泰期の副使として名前が現れる蘇惹、爬燕之だったのか。しかし泰期は1372年に明に派遣されたとしても、琉球に還ったとの記載はない。亜蘭匏関連の人々ではなかろうか。石井は亜蘭匏即ち、東行きの航路の案内人として沖永良部島の豪族を考えている。^(注14)

また近年別の方面からも那覇近辺の航海の難しさが論じられている。既に、1683年の汪楫『使琉球雜録』にも「那覇港口一里九曲」における入出港・曳船の難しさや岩礁の危険があったことの記述があり、これによっ

(注14) 石井は亜蘭匏を「沖永良部島の武門」だと言う。文献上の根拠としては明史料に、「琉球國の民「才孤那」らが河蘭埠へ（或いは河蘭埠から）舟を操舵して硫黄を採掘しに来たが、海で大風に遭い、小琉球（台湾島）に至った。水を得ようとしてそこで8人が殺された。脱出して再び風に流され惠州海豊（広東）に漂着した。言葉が通じなかったので当局は倭人と認定して南京に送った。丁度其の国の入貢使が来たので一人紗五錠を与え28人を帰国させた」（『太217』1392-5）とある点である。硫黄島が沖永良部の西側に位置するということから、この「河蘭埠」を沖永良部だと比定する（石井14）。石井は琉球朝貢物の硫黄は硫黄島産だと考えている。そして当時の「沖永良部島の豪族としては「永良部世の主」及びその重臣後蘭（ぐら）孫八があり、亜蘭匏に擬し易い。後蘭孫八は永良部孫八とも呼ばれる」。これは、永良部世主の家譜である「世の主由緒書」1850年に拠っている（原写本は世の宗主氏の家中に三分の一のみ現存するという）（石井15）。

これは最近の新説だが、亜蘭匏を宮古・八重山・久米島を繋ぐ商業集団（マサク集団）の関係者だとする論考（大西140-160）もあるので参照されたい。

て「港口にサンゴ礁が広がり、この土地で成長したものでなければ船を引いて入港することができない」と判断されている(高橋416)。^(注15)

他方で明朝側もかなり早期から海岸線の防備を行っている。即ち、「福建は琉球及び日本内地と接しているので、明国草創以来、倭寇に備える衛戍を設置し、福州の入り口は曲折する河道によって琉球からの朝貢船を迂回させていた。有事の際に福州府を直撃させないため」という政策からであった。しかしそれは明朝内部の権力闘争に繋がっていた。「明国東南部で貿易派の宦官と拒絶派の清官との闘争は明初の鄭和時代から明末まで続くが、特に福州で闘争の焦点は琉球である」(石井28)と言われる。具体的には、貿易拒絶派はその後「1498年に鎮守宦官鄧原が新たな直通河道を開鑿し、それ以後琉球使節は迂回せずに福州府に到達している・・・(中略)・・・この河道を塞ぎ、琉球船には旧来の河道を迂回させるべきである」と主張することになるのであった。既に15世紀末から明の官僚と永楽帝の間で私商を巡る立場の相違が明史料に見られたことは、現場レベルでの明当局の対応が決して単純ではなかったことを明らかにしている。^(注16)

いずれにせよ、このような明国家成立時からの制限が存在する条件下で、1372年に古琉球が明に朝貢を始めたこと史書には記述されている。勿論それはシナ海域に安定をもたらすものではなかった。福州東南海にある牛山島から「琉球大洋」まで倭賊を追いかけた事実(1373年『秘閣元龜政要』卷九、他)、そして「琉球大洋」で倭寇の人船若干を捕らえたという事実(1374年『國朝獻徴録』通行本卷八)が記載されている明史料があり、それは次のように説明されている。

反朱元璋の残党が福建沿岸で倭寇と連合するのを明朝廷は恐れていたもので、これらは当時重視された事件であった。この動きが意味するのは、首里方面の主力倭寇は朝貢の利と引き換えに休戦したが、宮古・八重山にいる残党が台湾海峡(「琉球大洋」とは石井によれば台湾海峡を指す)まで撃退されるのである、と。即ち、「八

^(注15) かなり長期にわたり琉球人しか航行できない状況が続いていたのだとしたとすれば、1500-22年の長期に及ぶ尚真王のアカハチ征討は、琉球=福建航路支配を巡る先島勢と沖縄本島勢の争いで、中山王が宮古島勢の協力により保守・独占に成功した争いだということもできるのではないか。

^(注16) これは1523年寧波の乱の際に、海防上の危機感から福州府の入り口の河道を論じた謝黃(漢文史料。年号を除き石井の翻訳をそのまま引用した)に即した主張である。この論文は「寧波の乱のような危機に備える」ことを目的としたものである。石井は1525年に明朝が琉球を通じて室町幕府に勅諭を送って寧波事件の調停を求めたこと背景に、このような琉球と倭寇の同一視の認識が当時あったと主張する。既に1488年1月と3月に琉球使節が浙江省から朝貢している事実があるので琉球と日本内地が一体なのが実情であったと言う(石井28-29)。石井は宦官と清官の対立状況を永楽帝以降のことと考えているが、幾分時期を早めて考えることもできよう。

というのは、1404年に暹羅国の貿易船が琉球に来て交易し、帰帆時に福建に漂着した。このことの琉球に対する影響についてほとんど明らかにされていることはないが、『明史』によれば1406年(思紹が中山王となった年)に、中山は去勢官吏数人を永楽帝に献じたが、受け取りを拒否されている。おそらく中山は暹羅・福建経由で去勢人朝貢のことを聞いたと想像される。しかし、この頃宦官の権勢をめぐっての政争は激しかったことを知らなかったのではないか。ともかく当時福建中心にこのような人材に対する取引が盛んであったので、この二年間に中山が環シナ海貿易の取引商品についての知識を得たのだらうことも想定される。1406年にやはり山南王・山北王も遣使して方物を献じているが彼らはそのような情報を知らなかったように見える。或いは宦官勢力の役割に対して中山と異なる見方をしていたのかもしれない。なお朝鮮半島からの去勢人の明への進貢は14世紀末には目立つものがあつた。

重山で出土する白磁等」と関連させれば、「倭寇は八重山乃至沖縄諸島に根城を持っていたがゆえにこの方向に逃げ」た(石井19-20)。

これらの史料からは、亜蘭匏等の南海商人集団は宮古・八重山を含む領域で本格的な商業活動を営んでいた可能性を窺い知ることができる。この諸事実によって、1390年における琉球から明への蘇木・胡椒の導入は経路のミッシング・リンクの大きな部分を解決できることになる。明体制に包摂されない彼等を久米島・宮古・八重山を活動領域に含む「マサク集団」と名付ければ、日本を経由しない暹羅國からの流通ルートとして明らかになるのではないだろうか。或いはむしろこの「マサク集団」が亜蘭匏を中心仲介者として、てどこんを中心とする南山勢力に結びつき、尚巴志への権力以降の重要な役割を果たしたのではないか。三山が競って南海物資を明にもたらした1390年に、宮古・八重山の中山進貢があったとの琉球諸史料は、この事実を全体的に示すための、実際の出来事とは乖離した象徴的恣意的暦年設定だったのではなかろうか。

B) 宮古・八重山の中山進貢と察度の実在性

それでは1390年と言われる宮古・八重山の琉球への進貢は果たして中山王に対するものだったのだろうか。或いは見方を変えれば何故山南王に対するものでなかったのだろうか。実際琉球側史料によれば1402年に思紹を継いで佐敷按司になった尚巴志は山南王を攻略し自らが山南王になっている。そして中山・山北も大半が山南王に帰服したので尚巴志は浦添・武寧を攻落して中山王となったとされる。また、『明実録』(1415年3月の条)の他魯毎の記事と『中山世鑑』の記事が類似していることを根拠に「佐敷の指導者が諸侯を率いて山南王を倒し、自らが山南王となったという史実」はあったのではないかと推測もされている(生田358-359)。この記述によって1390年頃の沖縄本島を想定する限りでは、山南王こそが当時の沖縄本島の最有力者であったように見える。1384年に最初に明側史料に現れた記述からも、少なくとも三山が同等に扱われているので、この時期特に中山が沖縄本島を代表しているようにも見えない。

次に、進貢相手である察度王の生存に関する記述についても不明のことが多い。1390年に察度は存在していたのだろうか。琉球側の史料では察度王は1395年没し世子武寧が王位についたとされているが、明側の史料では1403年の中山王世子武寧の使節の三五郎尾が察度の訃を伝えたことしか分からない(そもそも察度に続く中山王武寧の生涯に関する記述、即ち思紹・尚巴志への継承の記述等、は琉球史料自体が混乱している)。

朝鮮史料によれば、中山王察度は1389年に高麗に使者を送り倭寇の被虜人を送還したとあるが、そこでは「表を奉り臣と称し」とされている。明中心のハブ構造を特徴とする朝貢体制から考えれば、この「中山王察度」は偽称の可能性が少なくない(小葉田2-3を参照せよ。また嘉手納78は、琉球と朝鮮半島の通交は1389年が最初であることを『高麗史』を根拠に主張しているが、そのことはこれが中山王察度の遣使であることには直結しない)。1392年になって中山王察度が『李朝実録』に現れるがやはり1389年と同じく臣と称している上に、暦年月の表示がなく、信用し難い。その後は中山王察度の名は発遣者として1394年と1397年に出現するが、それ迄の経過を考えれば真偽の評価は困難である。

他方、山南王の実在性については比較的明らかである。例えば、1388年の年賀に山南王淑汪英紫とその弟が、使者派遣でなく本人自ら直接入貢したと『明実録』に記載される(嘉手納76)。これと同じ程度で中山王察度の存在を認知することはできない。常に使節の影に隠れている。そしてまた1387年から1394年の時期、亜蘭匏の関わる中山王察度の対明進貢はほぼ山南王の進貢と並行している。

1391年には察度と世子武寧の使臣として亜蘭匏と越來掟が馬等貢するが、山南王淑汪英紫も遣使を行って

いる。ここで亜蘭匏は察度・武寧両者共同の使臣なのか、それとも亜蘭匏と越來掟はそれぞれ別の主の使臣なのかははっきりしない。常に同時的に現れる山南王の進貢とどういう関係にあるかも不明である。1392年になっても察度と武寧は馬を貢しているが、察度は通事の程復・葉希伊の琉球居留を太祖に願い出、太祖はこれを認め閩人三十六姓を与え航海・通訳の便宜を図ったと史書は述べる。但し、これも1579年の冊封副使の記述とは異なっていて事実かどうか不明である。また従来の通説においても否定的に扱われることが多い。

1394年に亜蘭匏は察度使として王位の冠帯を求め、明の太祖はそれに応じて亜蘭匏を王相としたとされ、『世譜』は琉球における王相の初めとするが、明においてはこの地位は既に廃されていたのである。更には、1395年に察度の使としての王相亜蘭匏の進貢があり、同年に山南王淑汪英紫、山北王珉も進貢しそれぞれ鈔を得る。1398年王相亜蘭匏は馬・硫黄を（察度の訃報を告げず）世子武寧の名で入貢する。まるで王の察度は亜蘭匏の影のような存在ではないか。

それに対して、稲村賢敷の南山「大里勢力」は、現地調査・伝説収集の迫真力に支えられて我々に再考を迫っている。

試論：宮古・八重山史のあやうさ

慶世村恒任によれば、マサクは1387年進貢使亜蘭匏等が対明進貢する船を見つけて白川浜から出航し、那覇泊港に着いたが言語不通だったので察度王は三年泊村に住ませた。マサクは20名の部下にそこで琉語を学ばせた。そして1390年に八重山島の首長を導いて一緒に中山に参ったのだった。稲村賢敷もほぼ同様の解釈である。

砂川明芳では次のようである。1386年マサク達は北海で亜蘭匏達が明への貢物の馬・硫黄を積んだ船に出会う。言語は通じないが亜蘭匏達と物々交換した。マサク達が出したのは南方物資の香料等であった。亜蘭匏達は明でこの南海物資も貢物にした。明側は不審に思ったが相手が中山なので大目にみた。1390年にマサクは八重山の人を伴い中山に入貢した。この時マサク達は貢物に胡椒・蘇木を持っていったが、これ等はその年の中山の対明進貢物の中心となり、相手方に大喜びされ多量の見返り物資を得た。この時から中山は強大になった（砂川28）。非常に明快である。しかしここではマサク達はまず1386年に亜蘭匏等と出会い、香料を彼らに渡すという前段があり、続いて4年後に胡椒・蘇木を持って中山に行くことになっている。

琉球史料ではどうか。『中山世鑑』（巻2）では1389年に察度が琉球人を明朝に留学させたとの記事に続いて（但し明史料ではこの年ではない）、1390年に琉球国の対明進貢を知った南夷の宮古島と八重山が義を慕って来貢した。その後毎年の進貢が決まったと言う。与那覇勢頭についての関説はない。『蔡鐸版中山世譜』は事大の義を知った宮古島及び太平山（八重山？）が臣と称した、と記するが納貢については何も触れていない。与那覇勢頭についても触れていない。『蔡温版中山世譜』正巻では1390年に世子武寧が蘇木・胡椒等を表賀入貢した記事に続き、宮古・八重山が臣と称して貢した、とある。二島の人々は事大の礼を見習ったとあり、中山がこれにより始めて強くなったと言う。与那覇勢頭については触れられていない。『球陽（巻1）』には1390年のこととして宮古・八重山始めて入貢すとあり蔡温版と同様の内容である。ここにはやはり与那覇勢頭の名はないが、彼に就いては1394年に附として、始めて以て款を中山に納る、と記載される所に名前が上がる。まるで1390年の宮古・八重山の進貢は与那覇勢頭によるものではないかのようである。

宮古島では宮古・八重山が中山に初めて入貢した年は1390年で与那覇勢頭によるものだったとされている。

これは琉球史書では唯一彼の名前が記されている『球陽』の当該箇所を1390年に移して合体させたものである。かつて蔡鐸版『中山世譜』における1390年の記事については、宮古・八重山の入貢は1390年だという久米村の起源説話を、1389年の官生派遣に追加したものだとし、蔡温版の宮古・八重山入貢記事はこれをそのまま採用したものであると紹介されたことがある（生田357-8）。それでもマサクが『球陽』にしか記載されていないのは何故かという疑問は残る。

いずれにしても1390年の宮古・八重山の中山進貢について明側史料で確認はできない。それは久米村の起源説話だというなら、それ以上の事実確認は難しい。久米村の活動範囲を超える古琉球＝宮古・八重山関係の出来事については勿論である。しかしここでは次のことに注意したい。

『中山世鑑』は1390年に宮古・八重山の入貢が決まったと述べている。『蔡鐸版中山世譜』は宮古・八重山の入貢義務を述べていない。『蔡温版中山世譜』正巻も入貢義務を述べていない。しかし中山はこれによって始めて強くなったとは言う。『球陽』は1390年については『蔡温版中山世譜』正巻と同じであるが、新たに1394年に与那覇勢頭の名を出して、始めて以て款を中山に納ると言う。以上をまとめれば1390年には宮古・八重山の入貢義務は決定されたかどうかは微妙または否定的であり、仮に決定されていたとしても支払い責任者の名はない。『球陽』に至って始めて1394年附に約款の成立と支払い義務者与那覇勢頭が明示されたのである。しかし宮古島史が探し求めていたマサクは1390年の与那覇勢頭だった筈である。

結局のところ、従来の宮古・八重山と古琉球に関する言説が限られた領域からの情報に留まっていた以上、亜蘭匏に繋がる集団の南海物資取引を含む主要な出来事について、具体的な時期や出来事の真偽を確定するほどに根拠ある情報は存在しないと言った方が正確だろう。

更に言えば、果たして宮古・八重山が自ら率先して中山の支配下に入ろうとしていたのかという点こそむしろ疑問だと考えたい。琉球史料が作成され始めた17世紀中頃、中山政庁が宮古・八重山を自らの固有財産・排他的属領であると内外に示す必要があったのではないか。そのため、琉球国の成立初期から彼らが自ら望んで中山王に忠誠貢納の意志を示していたと史料上明確にしたいという編集意図が政庁の中心部にあったのではないだろうか。^(注17)

^(注17) 例えば、最も早い琉球史料『中山世鑑』は1650年編述である（生田354によれば主内容は1579年以前完成）が、当時明清交代期であって琉球政庁は深刻な財政危機にあった。その時点での『中山世譜』附巻1650年の注釈に概略次のようにある。「先年支那の明国の亡命政権の使者が派遣されてきたが、予期していなかったため琉球政庁には接待費用がなかった。薩摩藩へ書面を送って、宮古・八重山を抵当に六ヶ年期限で銀9000両を借りた。ところが予定の返済期限になっても償還できないので国頭親方を派遣して延期方を薩摩にお願いした」（源167を抄訳）。実は経済的に宮古・八重山を自らの処分可能な固有資産として抵当に当てたかったのであり、既に1646年には借金返済策として従来自由販売であった黒糖を琉球政庁の専買にして薩摩へ転売することで巨利をあげ、元利返済にあてるという案が三司官で合意されていたのであった。先島を抵当にした政庁の砂糖買い上げは1650年に始まる（源163-173）。

引用文献

- 生田滋 「琉球国の「三山統一」」(『東洋学報』第65巻1984年 340-372)
- 石橋崇雄『大清帝国』2000年
- 稲村賢敷「史跡に現れた三山の争乱とその統一」(『琉球』11号1959年 5-13、12号1960年 11-27)
- 石井望 『尖閣島名の淵源(下)』2021年
- 伊波普猷「南山王の朝鮮亡命」(『伊波普猷全集第七巻』499-518但し1931年初出)
- 上里隆史『海の王国・琉球』2018年
- 太田弘毅『倭寇』2002年
- 大西威人「マサクとその時代」(『宮古島市総合博物館紀要』第28号2024年135-160)
- 小葉田淳『中世南島通交史の研究』1939年
- 蔭木原洋「洪武帝初期の対琉球政策」(兵庫教育大学東洋史研究会『東洋史訪』第14号2008年)
- 嘉手納宗徳『琉球史の再考察』1987年(初出は1377~1383年)
- 亀井明徳「琉球陶磁貿易の構造的な理解」(『日本史学年次別論文集 中世1』1999年754-767)
- 砂川明芳『宮古島郷土史考』1976年
- 孫薇 『中国から見た古琉球の世界』2016年
- 高橋康夫『海の「京都」』2015年
- 高良倉吉「琉球・沖縄の島々を巡る」(豊見山和行・高良倉吉編『琉球・沖縄と海上の道』2005年1-53)
- 豊見山和行『琉球・沖縄史の世界』2002年
- 中島楽章「16世紀東アジア海域の軍需品貿易」(鹿毛敏夫編『硫黄と銀の室町・戦国』2021年299-334)
- 中村和之「アイヌの北方交易とアイヌ文化」(『東アジア内海世界の交流史』2008年63-82)
- 野口鐵郎『中国と琉球』1977年
- 源武雄 『琉球歴史夜話』1971年
- 山内晋次「日本列島の硫黄とアジアにおける「硫黄の道」」(鹿毛敏夫編『硫黄と銀の室町・戦国』2021年3-24)
- 山里純一『古代日本と南島の交流』1999年
- 渡口真清「建文年間の通航」(『郷土の友』1964年25-29)
- 和田清A『東亜史論叢』1942年(所収論文「満蒙史の大勢」269-290は1939年。「明代の蒙古と満州」304-361は1935年の発表)
- 和田清B『東亜史研究(蒙古篇)』1959年

